

## 東京大学名誉博士称号授与制度



## 目 次

はじめに（副学長 廣渡清吾）.....	3
東京大学名誉博士称号授与制度について.....	4
アマルティア・セン博士プロフィール.....	4

## はじめに

2002年2月19日、東京大学はアマルティア・セン博士に東京大学名誉博士の称号を授与する式典を行なった。これまで東京大学は、名誉博士の制度をもたなかった。2001年4月に就任した佐々木毅総長は、名誉博士制度の意義を強調して、これを創設することを評議会に提案し、評議会は2001年11月に東京大学名誉博士称号授与規則を制定した。セン博士は、同規則に基づき、評議会の議を経て東京大学名誉博士の称号を授与されたものである。

東京大学は、世界の学術研究の発展を担い、人類の平和と福祉に貢献する有為の人材を育てることを目的としている。この目的は、世界の様々な大学とともに、東京大学が共有するものであり、そこには自ずからグローバルな学術的共同体 (Scientific Community) が生成している。東京大学は、この共同体の発展に顕著な功績をあげ、私たちに勇気を与えてくれる有な奄、東京大学とのホゝがいかなるものであいか×ホ濁ることなほ顕心し、私たち×誘弄奄意的q 鮪丁ることが、グローバルな学術ぐ鱈 寶翠 燹 恩憐イ燎í翠咬イ石 音吳憐養輩傳免 麓傘麼尺傘々嬰

セン博士は、移ン渝の壇服罌 璐 紘劫 牲躡傘支 門辛 非 韦先銘先銖載Ē 替錡苙景 替鉅^新勻 緘 薜衣俞 究成蝸を癸 してき急ア第ア 荒昏の学\*であるî 酈滅 憲翠<sup>キ</sup> 蘊例 榆駘榔 号; 珣珍榆 〃 養輩傳醢変置翠錯斬 には世界の ヲと輒癸姊の<sup>善</sup>い 弓的lホ 寿お 疑みれている。こ鋭した蚊罌 三<sup>兪</sup> 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌

学内 彙報の本号ム 既過のな河¼名誉博士制度の創設及び 薜 委<sup>サ</sup> 称号授与の意義× へみ、これ×ホ 敷 罌スを个く普

副学長 廣 渡 清 吾

## 東京大学名誉博士称号授与制度について

### I . 東京大学名誉博士称号制度の創設

#### 1 . 制度創設の経緯

東京大学は、平成13年9月にワーキンググループを設置し、名誉博士称号制度創設の意義、及び創設する場合の制度等について検討を行い、平成13年11月の評議会において「東京大学名誉博士称号授与規則」を制定し、制度を創設した。

#### 2 . 制度創設の意義

本制度は、学術文化の発展に特に顕著な貢献をした者、又は本学の教育研究の発展に特に顕著な功績があった者を顕彰することにより、本学における教育研究の発展及びその基盤を社会に対して顕らかにし、本学の国際的地位を確固たるものとしていく上で極めて有意義であるとともに、世界における学術文化の一層の発展に寄与するものである。

#### 3 . 称号授与の要件等

称号は「東京大学名誉博士」とし、学術文化の発展に特に顕著な貢献があり、本学において顕彰することが適当と認められる者、又は本学の教育研究の発展に関して、国際的観点からその功績が特に顕著であった者に授与することができるものとしている。

### II . アマルティア・セン博士に対する名誉博士称号の授与について

#### 1 . 被授与者の決定

本制度に基づき、名誉博士称号授与審査委員会において最初の被授与者に、アマルティア・セン博士（ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学長）を選出、1月22日(火)の評議会において決定し、東京大学名誉博士の称号を授与することとした。

セン博士は、開発と貧困の問題に関する研究業績により、広汎な学問分野にインパクトを与え、世界の学術文化の発展に対しすぐれて顕著な貢献をなしたものとして、授与が決定されたものである。1998年にノーベル経済学賞を受賞している。

#### 2 . 東京大学名誉博士称号授与審査委員会

第1回 平成13年12月18日(火)

第2回 平成14年1月19日(火)

記者会見

19:15～19:45 履歴等

##### (1) 学 歴

カルカット大学 プレジデンシィ・カレッジ

1953卒業

ケンブリッジ大学 トリニティ・カレッジ 1959

Ph.D.取得

##### (2) 最近の職歴

ハーバード大学レイメント・ユニバーシティ教授、

同大学経済学及び哲学教授 1988

1997

ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学長

1998. 1～(現職)

#### (3) 主な受賞等

インド経済学会会長 1989

アメリカ経済学会会長 1994

オックスフォード大学名誉文学博士 1996

キール大学名誉博士 1997

ハーグ社会科学研究所名誉フェロー

ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノ

ミクス名誉フェロー

サセックス大学開発研究所名誉フェロー

デリー大学名誉教授

英国王立経済学会名誉副総裁 1988～

国際経済学会名誉会長 1989～

ジーン・メイヤー・グローバル・シティズンシッ

プ賞 1993

アジア協会インディラ・ガンジー・ゴールド・メ

ダル 1994

エディンバラ・メダル 1997

第9回カタロニア国際賞 1997

ノーベル経済学賞 1998

## 功 績 書

貧しい人のために社会は何をなすべきか。そのような厚生経済学における規範的な問いは、一見妥当な五つの公理を置くだけで個人の選好からまともな社会的選択ルールを導くことはできないという不可能性定理をケネス・アローが証明して以降、久しく等閑視されてきた。1970年に発表されたセン教授の『集合的選択と社会的厚生』は、この障害を乗り越え、この問題に対するわれわれの理解を深め、厚生経済学に倫理的側面を復活させるきっかけとなった。セン教授は、パレート派リベラルの不可能性定理を証明することにより、また自らの効用のみに基づいて行動するという「合理的な愚か者」の仮定を批判することによって伝統的な厚生経済学が仮定する情報的基礎が不適切であることを示した。このような不適切な情報的基礎こそが、伝統的経済学が不平等に対して意義あることを主張できない理由である。われわれは人々の福祉を正しく捉える情報的基礎を必要としているのである。

人々の福祉を正しく捉えるためにセン教授は「潜在能力アプローチ」を提唱する。かれによれば、人々の福祉は、人が何を行えるのか、どんな状態になりうるのかという可能性によって測られるべきものである。何ができるのか、どんな状態になりうるのかはそれぞれ機能と呼ばれ、そのベクトルの集合が潜在能力と呼ばれるものである。セン教授は、平等も潜在能力の領域で追求されるべきであると主張する。潜在能力は人がなし得ることの範囲を示しており、その意味で自由の程度を示している。潜在能力によって発展を再定義したとき、発展とは人々の自由に向けた道なのである。このような潜在能力の考え方は、国連の「人間開発指標」の中にすでに取り入れられている。

貧困研究においても、セン教授は理論・実証の両面で主導的な役割を果たしてきた。理論的には、1976年の論文で五つの公理からいわゆるセンの貧困指数を導き、それに触発されて貧困指数に関する理論的研究が著しく進み、多くの貧困指数が提案された。実証分析に関しては1981年に発表された『貧困と飢饉』において、かれはエンタイトルメントという新しい概念を導入し飢饉の分析に応用した。飢饉の主たる原因は食糧不足であるというそれまで広く信じられてきた説を否定し、飢饉の真の原因は社会の特定グループの食糧に対するエンタイトルメントが奪われることにあると主張した。また、セン教授は飢饉を防ぐために民主主義が重要な役割を果たすことを強調してきた。この研究は、その後、セン教授らによる一連の貧困・飢餓・生活の質に関する研究へと展開し、80年代・90年代における発展途上国の貧困研究を促進した。そして、このような貧困問題に対する関心の昂まりは、1990年代に入ってそれまで成長指向であった発展途上国に対する援助を貧困指向のものへと転換させる契機となった。

以上のように、セン教授の業績は、終始、人間社会に

対する深い倫理的な関心に導かれ世界の学術文化の発展に対して顕著な貢献を行ったものであり、東京大学名誉博士の称号を授与するにふさわしいものであると認められる。

よってここに、東京大学総長は、東京大学評議会の議を経て、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学長、アマルティア・セン教授に対して、東京大学名誉博士の称号を授与するものである。



アマルティア・セン博士の功績書を読む佐々木総長・岩井経済学研究科長



名誉博士称号授与式の参加者

Amartya Sen  
Doctor, honoris causa

## 名誉博士称号授与式 総長挨拶

アマルティア・セン博士およびご列席の皆様へ東京大学総長として、ご挨拶を申し上げます。ご来臨くださいましたセン博士に心から御礼申し上げます。またご多用のところ、本日の授与式にご出席くださいました皆様方に厚く御礼申し上げます。

本席には、

H.E. Mr. Jamil Majid (ジャミル マジッド)

バングラデシュ特命全権大使閣下

Mr. Biren Nanda (ビレン ナンダ)

インド特命全権臨時代理大使

Stuart Jack (スチュアート ジャック)

英国公使及び同令夫人

Mr. Mike Winter (マイク ウィンター)

ブリティッシュ・カウンシル駐日副代表

にもお出でいただきましたので、皆様にご紹介いたしますとともに、ご出席に感謝申し上げます次第であります。

セン博士は、経済学理論の立場から、20世紀の世界が抱えた開発と貧困の問題に正面から取り組み、大きな成果をあげられました。私たちは、博士のお仕事人類に対する深い倫理的な関心に導かれたものであることを知ることができます。東京大学名誉博士の授与は、広く世界の学術文化の発展に貢献し、人類の共有する知的な資産を創造した科学者を、東京大学が世界の学術文化のコミュニティの一員として顕彰しようとするものであります。

東京大学は、セン博士の業績に対して心から尊敬と感謝の気持ちをもつものであり、初めての東京大学名誉博士の称号をセン博士にお贈りすることができたことを、心から喜び、名誉とするものであります。

東京大学は、21世紀の世界において、これまで以上に学術文化の発展に貢献したいと考えます。今回、セン博士に対する名誉博士称号授与は、そのような東京大学の自覚を示そうとするものであるとご理解いただければ、誠に幸いです。

本日ご列席の皆様へ、セン博士への東京大学名誉博士称号授与をともに祝っていただいたことに、あらためて、感謝申し上げます。最後に、セン博士がその健康に十分配慮され、セン博士のお仕事は今後一層の成果を生み出し、私たちに刺激と希望を与えてくれることを心から祈念して、東京大学総長としてこの短い挨拶を閉じるといたします。ありがとうございました。



授与式で挨拶をするアマルティア・セン博士



## 文明は衝突するのか：問いを問い直す<sup>①</sup>

Questioning the Question: Do Civilizations Clash ?

Amartya Sen (アマルティア・セン)

訳：佐藤 仁 (新領域創成科学研究科・助教授)

このようにすばらしい形で東京大学の仲間入りをする機会が与えられたことを大変光栄に感じ、また感謝いたします。東京大学との学問的な関係は、これからの私にとってもかけがえのないものになるでしょう。

講演の主題として私が選んだのは、今日世界で起っているとされる「文明の衝突」についてです。この主題は、サミュエル・ハンチントンのよくできた著名な本が出版されてから広く議論されてきました<sup>②</sup>。9月11日の恐ろしい出来事は、すさまじい紛争と不信の渦巻く世界へと私たちを先導することになっただけでなく、いわゆる「文明の衝突」への関心を大きくしました。事実、多くの有力な論評者たちは、(特に、ハンチントンが示したような文化や宗教を基準にした)概念的な区分と、今日の世界各地でみられる残虐行為との間には確固とした連関があるかのように見がちでした。

たしかに、そこには何らかの関連があるのかもしれませんが、それが正確になんであるかを精査し、吟味する必要があるでしょう。また、文明間の衝突という特定のイデオロギーに基づいた世界観それ自体が、世界での物理的な対立や暴力的な事件を煽ることになってはいないか、と問わなくてはなりません。私はこの講演で、「文明は衝突するのか」という問いが間違った方向の研究をはじめの契機をつくり、それを助長する作用があると主張するつもりです。その問いは、人類がはっきりとした形で個別に分類できるという、ほとんど分析されておらず、また十分に擁護されてもない前提に立脚しているからです。この問いに対して私たちがどう答えようと、つまり、文明が衝突するという理論に賛成だろうが反対だろうが、この問い方を認めたまま答えようとしてしま

酋帽弁鏑砲



して、その決定は、文脈から独立した不変な分類に基づいて決まるのではなく、文脈に依存して決められることです。これと同じくらい重要なことですが、アイデンティティというものは（コミュニタリアニズムを支持する哲学者たちがよく主張するように）「見出す」だけのものではありません。それは選択の問題でもあるのです。

#### 諸制約と他者のまなざし

アイデンティティとは、それを「見出す」かどうかの問題である、と繰り返し言及されるのは、選択の幅がその実現可能性によって制約されているからであると言えるでしょう。制約はしばしば、とてもきつく効いてきます。実現可能性は、もちろん特定の状況に依存します。とくに、自分たちは、他人がそう思っているような人間ではないと他者をどこまで説得できるか、ということになると特に厳しい制約に直面しなくてははいけません。

---

います。そこでは「中華」や「日本」といった雑種的な文明の分類も含まれているのですが、宗教的な違いに由来するとされる争いの舞台は、宗教と文化によって形づくられた支配的で強固な一つの区分に基づく機械的世界観で説明されています。

すべての人々を一律に、「イスラム世界」「キリスト世界」「ヒンズー世界」「仏教世界」などに分けることで、人々の間に垣根が作られ、それが人々を堅固な箱の中にしっかりと閉じ込めてしまうのです。人々の差異を見るとき唯一優れた見方であるとされるこの基準によって、他の仕切り方、例えば、貧者と富者、階級や職業による区別、支持政党による区別、国籍や居住場所による区別、言語グループによる区別などは、すべて隠されてしまいます。

さらに、この分類の粗雑さは、ハンチントンやその他の同じ考えをもつ人々に、「西欧文明」こそ世界で唯一、政治的な寛容さをもたらす源であると考えさせる方向性を備えています。寛容に注目することは、最近のヨーロッパの歴史（特に18世紀以降）の中でも力強い側面であることは確かで、西欧がなしえたことから世界が学ぶべきことが多いのは確かです。しかし、「文明の衝突」を擁護する人々は、人々を分け隔てる文明の一本線が唯一の重みをもつと信じ込むのと同じように、寛容が西欧文明の歴史を永遠にさかのぼることのできる、特別の特徴であるかのように見ます。これは歴史的事実に反しています。ハンチントンは主張します。「西洋は近代化する以前から西洋であった」と。もちろん、これは度を過ぎた単純化であります。この点には後ほど戻りたいと思います。

#### 「唯一である」という扇動的な主張

「文明の衝突」論の最も基本的な弱点は、たった一つの、他を圧倒するとされる分類によって世界の人々を区分してしまう仕組みにあります。つまり、この議論は、私たちが文明は衝突しなくては行けないのかどうかを問うずっと以前の段階から間違っているのです。「文明は衝突するのか」という問いの形に沿ってしまうと、それにどう答えようとしても、狭く、恣意的で、誤解の多い方法で世界の人々を考えるよう追いやられてしまうのです。そして、この問いは、人を困惑させる力が大きいいため、その理論を支持したい人だけでなく、それに反論したい人までが罨にかかり、あらかじめ特定された枠組みの中でしか答えられないように仕向けてしまうのです。「イスラム世界」や「ヒンズー世界」、あるいは「キリスト教世界」について話すという時点で、すでに一つの次元に人々を押し込めていることとなります。「西側世界は、イスラム世界と戦っているわけではない」とハンチントンに反論を唱える人々の多くでさえ、事実上、知らず知らず同じような狭い区分を共有するようになってしまいます。その区分法だけを重要なものとして受け容れてしまうことで、「衝突」の理論に疑問を呈し、反論

していた人々さえ、「文明の衝突」という主張に貢献することになってしまうのです。世界を文明の小箱に分けるというお粗末な世界観は、文明の調和を説く人にも、文明は衝突していると見る人にも同じように共有されているのです。

一つの区分法だけを信じ込むことは、状況の記述として深刻に間違っているだけでなく、潜在的には、倫理的そして政治的に危険です。人々は、自分たちを様々に認識しているのです。バングラデッシュ人のイスラム教徒は、単にイスラム教徒であるだけではなく、ベンガル文学を誇りに思うベンガル人かつバングラデッシュ人であることは十分ありえます。パキスタンからのバングラデッシュの分離は、宗教上の理由で促されたわけではなく、言語、文学、政治の方が効いています。ネパールのヒンズー教徒であれば、その人は単にヒンズー教徒であるだけではなく、政治的にも、民族的にも固有の特徴を兼ね備えているでしょう。そのことが、ネパールをして、インドとは異なる世界で唯一の公式のヒンズー国家に仕立てているのです。貧困であることも、様々な境界線を超えた連帯をもたらす大なる源泉になることができます。俗に「反グローバリゼーション」派と呼ばれる運動家たち（これは期せずして世界で最もグローバル化している運動なのです）が強調している線引きは、世界経済の落ちこぼれを連帯させることを試みています。彼らの提唱する線引きは、宗教や国境、あるいは「文明」による区分を超越するものです。複数のカテゴリーを認めることで、硬直的な分離や、それが促す扇動的な側面に反対することになっているのです。

実際、人を憎むというのは簡単ではありません。オグデン・ナッシュの詩は、この点を見事に表現しています。「学校の子供なら誰だって夢中で人を好きになれるけど、憎むとなれば、それは技を要するものだよ」。しかし、憎むという技術は、熟練した芸術家や扇動者の手によって発達してきたもので、そこでは唯一の限定された好戦的なアイデンティティを相手に付与するという武器が選ばれることが多いのです。私たちは、唐突に、自分たちが自らそう認識しているような存在ではないということ、かなり異なったものであることを知らされるのです。私たちは、自分たちに敵対的な他のグループに戦いを挑まなくてはならない人々の一員にされるのです。私たちは、例えば、ユーゴスラビア人ではなく、実はスラブであることを強い調子で告げられます。「私とあなたはアルバニア人が嫌いだ」と教え込まれるのです。あるいは、実はルワンダ人ではなく、フツ族であると。だから、「フツ族は嫌いである」と。インドが分割される以前の血なまぐさい1940年代を生きた年配の人であれば、それまで広くインド人や南アジア人、あるいは単に人間としてのアイデンティティをもっていた人が、突如として、単なるヒンズー教徒やイスラム教徒、あるいは単なるシーク派にとって代わり、「向こう側」V「イしほ

たった一つの支配的で好戦的なアイデンティティのもつ魔術的な力を呼び起こすという形をとります。それは、他の所属や関係だけでなく、普段であれば自然に備えているような人間としてのやさしさや共感のあらゆるものを飲み込んでしまうのです。それが結果としてもたらすものは、素朴で剥き出しの暴力か、グローバルに行われる手の込んだテロリズムと蛮行でしかないのです。

## 歴史の無知

いわゆる文明を基準にした分類は、道徳や政治的な側面から破壊的であるだけでなく、認識論上の中身も非常に疑わしいものです。世界の人々をたった一つの排他的な基準に特化して区分けしてしまうので、多くの重要なことが捨象されてしまっているのです。例えば、ハンチントンのいう「文明の衝突」の説明ではインドは「ヒンズー文明」として記述されてしまいますが、実は、インドはインドネシアとパキスタンを除いて、世界のどこより多くのムスリム人口を抱えているという事実が見えなくなります。「イスラム世界」という恣意的な定義のなかに、インドをいれることはできるのかもしれませんが、できないのかもしれませんが。しかし、イギリスとフランスの総人口を足したものよりも大きな1億2千500万人のイスラム教徒がいるインドは、俗に「イスラム世界」と呼ばれるほとんどの国よりもずっと多いイスラム教徒を抱えているというのが変わらぬ事実なのです。同時に、「インド文明」を考える上で、歴史上、イスラム教徒が果たした大きな役割を無視することはできません。宗教上のコミュニティの障壁を超えた広範な相互作用を見なくては、インドの芸術や文学、音楽や食文化というものの本質と影響の範囲を理解することはできません<sup>③</sup>。

---



\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

人々を「文明」という単一の基準で分けることが出来るという考え方を暗に認めることになってしまうのです。そこに基本的な間違いがあり、その間違いがわれわれを「文明の衝突」論に導いてしまうのです。衝突があるか、ないかを議論する以前の段階から問題ははじまっています。この疑わしい分類法が、便利で、世界の人々を分類する他のやり方よりも唯一適切であると考えるところで、すでに大きな間違いを犯しているからです。人類の協調も幅広い多様性も、危険なほど単純で、ばかげた公式に還元してしまうことはできません。世界は、そこで想定されているよりも、遥かにずっと豊かなのです。

アマルティア・セン博士の記念講演は、英語でスピーチが行われたが、出版物への掲載は和訳のみセン博士の了解が得られた。

本稿は、講演原稿を佐藤 仁助教授（新領域創成科学研究科）が全文和訳したものである。



講演会司会の宮島副学長



アマルティア・セン博士による記念講演

〔資料〕

## 東京大学名誉学位創設に係わる検討WGの設置について

補佐会

平成13年9月10日

## ．趣 旨

本WGは、東京大学において「名誉学位」制度を創設することの意義、ならびに創設する場合の制度及び関連事項を検討し、具体的な制度及び措置について提案することを目的とする。創設する制度の提案は、10月中旬を目途とする。

## ．検討事項

## 1．制度創設

- (1) 名誉学位創設の意義
- (2) 名誉学位規則の立案
- (3) 名誉学位記の様式等

## 2．学位授与式典関係

## 3．その他

## ．構 成

座 長 廣渡総長特別補佐

メンバー 立花総長補佐（文）、福山総長補佐（薬）、荒川総長補佐（学環）、企画調整官、総務部長

関係担当課 総務課、学務課、主計課、国際交流課

## 東京大学名誉博士称号授与規則

平成13年11月20日  
評 議 会 可 決

### (目的)

第1条 この規則は、学術文化の発展に特に顕著な貢献をした者、又は東京大学(以下「本学」という。)の教育研究の発展に特に顕著な功績があった者を顕彰することが、本学における教育研究の発展及びその基盤を社会に対して顕らかにし、本学の国際的地位を確固たるものとしていく上で極めて有意義であることにかんがみ、東京大学名誉博士(以下「名誉博士」という。)の称号を創設し、もって世界における学術文化の一層の発展に寄与することを目的とする。

### (授与の要件)

第2条 名誉博士の称号は、次の各号の一に該当する者に授与することができる。

- (1) 学術文化の発展に特に顕著な貢献があり、本学において顕彰することが適当と認められる者
- (2) 本学の教育研究の発展に関して、国際的観点からその功績が特に顕著であった者

### (推薦及び授与手続)

第3条 総長は、前条に該当すると認められる者がある場合、評議会の議を経て、名誉博士の称号を授与する。

2 前項のほか、部局長は、前条に該当すると認められるものがある場合、当該部局の教授会等の議を経て、これを総長に推薦することができる。推薦に当たっては、別記様式1の推薦書を提出するものとする。

3 総長は、前項の推薦があったときは、評議会の議を経て、名誉博士の称号を授与する。

4 評議会において、名誉博士の称号授与の議決をするためには、評議員定数の2分の1を超え、かつ、外国出張中の者を除く評議員総数の4分の3以上の者が出席し、出席者の4分の3以上の者の賛成がなければならないものとする。

### (審査委員会)

第4条 総長は、前条の規定により名誉博士の称号を授与しようとするときは、評議会の議に先立ち、名誉博士称号授与審査委員会(以下本条において「審査委員会」という。)を設置し、審査を行うものとする。

2 審査委員会は、総長、副学長、各研究科長(研究科以外の教育研究上の基本となる組織の長を含む。)及び各附置研究所長(先端科学技術研究センター長を含む。)で組織する。

3 審査委員会に委員長を置き、総長をもって充てる。

4 審査委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

5 前各項に定めるもののほか、審査委員会の運営に関し必要な事項は、審査委員会が定める。

### (名誉博士記の交付)

第5条 名誉博士の称号を授与するときは、別記様式2により名誉博士記を交付する。

### (細則)

第6条 この規則に定めるもののほか、名誉博士の称号授与に関し必要な事項は別に定める。

### 附 則

この規則は、平成13年11月20日から施行する。

#### 別記様式 1

年 月 日

東京大学総長 殿

官職・氏名

東京大学名誉博士称号授与候補者推薦書

下記の者は、東京大学名誉博士の称号を授与するにふさわしいと認められますので、関係書類を添えて推薦します。

記

#### (フリガナ)

氏 名  
生 年 月 日  
性 別  
国 籍

\* 関係書類として、推薦理由、略歴、功績の調書を添付すること。



## 東京大学名誉博士称号授与に関する申合せ

平成13年11月20日  
評 議 会 可 決

別記様式 2

名博第 号

名 誉 博 士 記

氏 名

1 あなたは学術文化の発展に特に顕著な貢献をされました本学はその貢献に対して東京大学名誉博士の称号を授与しその栄誉を顕彰します

2 あなたは本学の教育研究の発展に関して国際的観点から特に顕著な功績を挙げられました本学は東京大学名誉博士の称号を授与しその栄誉を顕彰します

年 月 日

東京大学総長 氏 名 印

東京大学（以下「本学」という。）における名誉博士の称号授与については、東京大学名誉博士称号授与規則（以下「規則」という。）の定めによるほか、次のとおり申し合わせるものとする。

- 1 名誉博士の称号を授与するに当たっては、当分の間、規則第2条に定める他、次の各号を考慮するものとする。
  - (1) 国外における教育研究上の功績、学術文化の発展への貢献が特に顕著な者を優先する。
  - (2) 定員内の教職員として本学に在籍し又は在籍したことのある者は、原則として、授与対象としないものとする。
- 2 称号を授与する際には、授与される者の功績を記載した文書を添付するものとする。
- 3 名誉博士の称号を授与された者は、授与に際し、講演を行うことを常例とする。

名誉博士称号授与式・記念講演会  
Honorary Title Conferment Ceremony and Commemorative Lecture

2002 . 2 . 19

- . 名誉博士称号授与式  
The Conferment of Honorary Title
  - 1 . 開式  
Opening
  - 2 . アマルティア・セン博士の功績  
Professor Amartya Sen's Achievements
  - 3 . 名誉博士記授与  
Conferment of the Title of Honorary Doctor
  - 4 . 記念品贈呈  
Commemorative Presentation
  - 5 . 総長挨拶  
Oration by President Takeshi Sasaki
  - 6 . アマルティア・セン博士挨拶  
Address by Professor Amartya Sen
  - 7 . 閉式  
Closing
  
- . アマルティア・セン博士記念講演会  
Commemorative Lecture by Professor Amartya Sen  
“ Questioning the Question: Do Civilizations Clash ? ”

名誉博士称号授与を伝える新聞記事の一覧

年 月 日	朝・夕刊別	新聞名	掲載面	表 題
平成14年2月20日	朝 刊	朝日新聞	37面	「東大名誉博士1号」
		産経新聞	30面	「セン博士に東大名誉博士号」
		東京新聞	28面	「ノーベル経済学賞のセン教授 東大が名誉博士号授与」
平成14年2月24日	朝 刊	朝日新聞	23面	「「文明の衝突」論を批判 東大初の名誉博士セン氏が記念講演会「多様な現実ゆがめる」」





名誉博士記



佐々木総長による挨拶



学位記の授与



佐々木総長と握手をするアマルティア・セン博士

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

1238 2002年5月8日  
東京大学広報委員会  
〒113 8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
東京大学総務課広報室 (3811) 3393  
e-mail kouhou@ml.adm.u.tokyo.ac.jp  
ホームページ [http://www.u.tokyo.ac.jp/index\\_j.html](http://www.u.tokyo.ac.jp/index_j.html)